

3歳児の身体表現—活動による表現力の違い—

若松 美恵子

(白梅学園短期大学)

(1) はじめに

私は、これまで幼稚園における、3歳児、4歳児、5歳児の身体表現の一斉指導による保育の観察によって、3歳児、4歳児、5歳児の身体表現力の発達を明らかにしてきた。これらの研究の過程において、3歳児については一斉指導による身体表現活動だけでなく他の場面においても身体表現をみる機会があった。これらの子ども達の身体の動きはどれも身体表現と称することができるが、場面によって動きの質が異なるように思う。動きの質が異なるということは、表現の質も異なるのではないかと考える。このことを明らかにすることは3歳児の身体表現、さらに幼児の身体表現の全容を明らかにすることにつながるのではないかと考える。

(2) 目的

3歳児の幼稚園生活において、活動場面によって身体表現がどのように異なるかを明らかにする。そのことにより、身体表現活動のみならず、幼稚園生活全般から3歳児の身体表現の全容を把握するてがかりをつかむ。

(3) 方法

1) 観察対象 東京都内の私立K幼稚園 3歳児

2クラス(各年度1クラス)各12名及び15名

2) 観察期間 1990、4～1991、2、及び1991、4～1992、2。

3) 手順

3歳児の幼稚園生活において、登園後の自由活動(室内)及び一斉活動における身体表現を保育室の一隅から子ども達の動き全体をVTRに収録した。また保育後に保育者と短時間ではあるが、子どもの動きで気が付いたこと等について意見交換をした。それらのメモとVTRによる動きの分析から検討し明らかにする。動きは、各年度夏休みを境にして前期、後期原則として2場面ずつとし、計8場面から取り上げた。

4) 分析の観点

1) 動き 2) 保育者や子どもとの関わり

3) 表現体になりきって動く

(4) 結果及び考察

幼稚園生活においてみられる身体表現を大別すると次の通りである。自由活動では、1) 気持ちの表れ 2) 遊びの中で何かになりきって動く 3) ごっこ遊び であり、一斉活動では、4) 劇あそび 5) リズム表現 6) 身体表現(自由表現)である。各身体表現の特徴は表1の通りである。

1) 気持ちの表れは、感情や欲求がそのまま全身まるごとの動きとなって表れたものである。それは主に上下肢を動かしてのものであるが、3歳児の運動発達に見合った両足跳び、前ギャロップ、片足けんけん等の跳躍が喜びの表現としてみられたのが特徴であった。2) 遊びの中で何かになりきって動くは、ブロック等の遊びの中でテレビ等のキャラクターを想像しての動きが男児に多く見られたが、1・2名での単発的な表現であった。3) ごっこ遊びは、主に保育室のコーナーでのままごと遊びからのものであるが、日常の動作の模倣であり、いわゆる手作業が中心である。これらは前期ではほとんど平行遊びであり、ごっこ遊びとして友達との社会的関わりや役割は後半に入ってみられた。4) 劇あそびは、保育者の誘導に促されて動くであったので、話の筋に従って登場人物(動物)になって動くのがおもしろく、又友達とくっついたり机の下にもぐったりするのが楽しいというものであった。5) リズム表現は、決められた動きを教わって動きを楽しむものである。最初は小さくごちない動きであったが、内容の理解と動きの習得が進むと、むしろそのものになりきって気持ちを込めて大きく動く。6) 身体表現は、表現したいものの形や動きの大まかな特徴を1つとらえて動くが、象徴的な動きで皆同じ様であった。そして表現するという意識より、何かになって走ったり、跳んだり、椅子の下に隠れたりするのが楽しいというようなものであった。

3歳児は幼稚園という新しい生活に多少緊張しながらも園生活への興味は広がり、次第に自己の感情や欲求を言葉や身体で表現するようになる。それは心身の発達段階から十分な表現力とは言えないが、保育者が愛情をもって受け止めれば徐々に発達し、子ども同士の楽しいコミュニケーションへと発展していくものである。

